

発話が困難な状態にある一全盲児の音声表出に関する研究

柄澤 安喜子

I 問題と目的

視覚障害児の発達の困難として、自発性や積極性が育ち難いという問題(五十嵐, 1993)や、外界への関心が育ち難く、発達の滞りが生じる(猪平, 2005)ということが指摘されている。天野(1990)は、子どもの言語発達において、発達に作用する聴覚や視覚、運動障害などの器質的な障害がある場合には、種々の言語障害や言語発達遅滞の原因となると述べている。以上のことから、視覚的情報の入手に困難がある視覚障害児にとって言語発達は課題といえる。

障害を持つ子どものコミュニケーションにおいて、表出方法が制限されることや発信の困難からかかわり手が理解し難いことによって受信側になる事が多い(徳永, 1995; 土谷, 2006)。そのため、かかわり手が子どもの体調の変化や表情、声、体の向きの変化、自発的な行動などを細かく感じ取り、それらに意味を見出していくことが必要とされている(鯨岡, 1990; 中澤, 2001; 土谷, 2006)。

音声によるコミュニケーションの中のパラ言語について石井・石黒・萩田(2006)は、円滑なコミュニケーションを実現するには、言語情報の理解と発話の意図や態度、感情を表現しているパラ言語を抽出し、理解していくことが重要性であると述べている。

以上のことから、本研究では発話が困難な状態にある先天性全盲児の音声表出について、パラ言語情報の観点から音声表出を聴覚的に分類し、表出の種類を明らかにすること(目的1)及び、発話が困難な状態にある先天性全盲児のかかわり手からの働きかけに対する音声表出の特徴について明らかにすること(目的2)を目的とした。

II 方法

1 対象児

発達に困難のある視覚障害(全盲)のM。研究開始当時、盲学校小学部6年に在籍していた。視

覚以外の感覚や運動機能に困難は見られない。両親以外への自発的な働きかけはほとんど見られず、他者に対しては自ら言葉を発することはまれで、様々なイントネーションをつけて「うん」と返事をしている。感情表出は豊かで、笑顔や困った顔などの表情、情動に伴った手足の動きが見られる。

かかわり手A・BはMが小学部6年生時から、かかわり手C・Dは小学部5年時から教育相談に参加している大学院学生である。

2 資料収集の方法と対象場面

20XX年12月13日、20XX+1年1月10日、2月14日にかかわり手とMのやりとりにおいて、Mの発声が多かった来所の場面、課題の場面のぼっち取り、タイル入れ、スライディングブロックの活動12セッションにおけるMとかかわり手のやりとりを対象とした。ビデオ記録はやりとりの様子が分かり、全体が映るように配慮してビデオカメラで撮影した。音声については、Mにワイヤレスマイクを付け、ICレコーダーで録音した。

3 資料分析の視点と方法

資料分析は以下の5点について行った。ICレコーダーで録音したMの音声表出を基に①聴覚的に分類した聴覚的分類項目を作成し(表1)、Mの音声表出について分類を行った。また、ビデオ記録を基に②トランスクリプトを作成した。このトランスクリプトを基に、③かかわり手の働きかけについて、三宅ら(1973)のカテゴリーを参考に新たに<翻訳><存在の知らせ><状況の説明>を加えて作成したかかわり手の働きかけのカテゴリー(表2)を用いて、どのような働きかけを行っているのかを分析した。さらに、④生起頻度が高い働きかけに対するMの応答と、生起頻度が高いMの聴覚的分類項目に対する働きかけについて分析し、⑤その関係性についても分析した。

活動ごとでは、共通して＜指示・命令＞＜呼びかけ＞＜報告＞＜状況の説明＞の生起頻度が高かった。その中でも来所は＜指示・命令＞の生起頻度が高く、移動や身支度、活動の確認などがあることから、直接行動を要求する働きかけが特徴と考えられる。学習課題のぼっち取りでは＜指示・命令＞が高く、タイル入れは＜指示・命令＞＜提案・誘い＞＜誘導＞が高く、特に＜誘導＞の生起頻度が高かった。スライディングブロックでは、＜指示・命令＞＜提案・誘い＞＜状況の説明＞が高く、その中でも＜提案・誘い＞＜状況の説明＞の生起頻度が高かった。タイル入れとスライディングブロックは行動を誘うような働きかけが多いことが特徴と考えられる。その中でも、スライディングブロックは見本に合わせて操作する複雑な活動があるため、他の活動に比べて＜状況の説明＞が最も多く生起することが特徴と考えられる。

3 働きかけと音声表出の関係性

かかわり手の働きかけで多く生起した8パターンのカテゴリーに対する聴覚的分類項目の生起頻度では、カテゴリーによって違いはあるが、全体的にH s →、Mm →、Mm ↘、M s →の生起頻度が高くなっていた。その中でも、＜誘導＞に対しては、H s →、Mm ↗、Mm →、M s →が高く、この4項目を使い分けられていることが分かる。また、＜受容・承認＞では、ほとんどの聴覚的類項目が生起しておらず、働きかけに返答をしない＜返答なし＞が突出して生起していることから、＜受容・承認＞の働きかけに対しては、Mは音声表出で返答していないことが明らかになった。

逆に、聴覚的分類項目で多く生起した4項目に対する働きかけのカテゴリーの生起頻度では、どの項目においても＜状況の説明＞に対しての生起頻度が突出して生起していたが、全体的にどの働きかけのカテゴリーにおいても、Mの音声表出の多い4項目(H s →、Mm →、Mm ↘、M s →)を使い分けて表出していることが示された。

IV 全体考察

Mは聴覚的分類項目の生起頻度の高い4項目を主に使用してコミュニケーションをとっていることが明らかになった。また、かかわり手の働きかけとMの音声表出の関係から、受容的な働きかけに対しては音声表出していないことが明らかになった。また、周囲の状況を伝えることや行動要求、注意喚起の働きかけが多いことは、Mの実態として他者に自ら働きかけることが少ないことや全盲であり周囲の状況が把握し難いためと推察できる。本研究で行った量的な観点からではMの表出の意味を見出すことは出来なかったが、Mの自発的な表出である音声表出とかかわり手の働きかけを合わせて検討していくことは、Mの音声表出の種類と使い分けについて明らかにしていく上で有効であったと推察される。

V 今後の課題

本研究では、Mの音声表出を応答の意味として抽出するまでには至らなかった。今後は全カテゴリー、全聴覚的分類項目を対象とした分析と、かかわり手の働きかけとして頻度の高い8カテゴリーに対してその特性と関連させてMの4種の表出の意味のカテゴリー分析を進めるための新たな手法を開発する必要がある。

文献

- 天野清 (1990) 言語的コミュニケーションの発達と障害. 教育と医学, 38 (6), 35 - 41.
- 五十嵐信敬 (1993) 視覚障害幼児の発達と指導. コレール社.
- 猪平眞理 (1996) 乳幼児期における支援. 香川邦生 (編著), 三訂版 視覚障害教育に携わる方のために. 慶応義塾大学出版会株式会社, 198 - 232.
- 石井カルロス寿憲・石黒浩・萩田紀博 (2006) 韻律および声質を表現した音響特徴と対話音声におけるパラ言語情報の知覚との関連. 情報処理学会論文誌, 47 (6), 1782-1792.
- 鯨岡峻 (1990) コミュニケーションの成り立ち. 教育と医学, 38 (6), 13 - 20.
- 中澤恵江 (2001) 盲ろう児のコミュニケーション方法一分類と体系化の試み. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 28, 43 - 55.
- 徳永豊 (1995) 自発的な動きの乏しい重度・重複障害児に対する「からだ遊び」の指導について. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 27, 9 - 15.
- 土谷良巳 (2006) 重症心身障害児・者とのコミュニケーション. 発達障害研究, 28 (4), 238 - 247.